むがしあ、あつたずおんな

ある山奥やまおくに、おばあさんがひとりで暮くらしていました。

あるときのことです。毎晩まいばん、おそくなると、十七、八のきれいな娘むすめたちが、にぎやかに歌いながら、おばあさんのうちにやって来ました。

うすい峠とうげの 法覚坊ほうかくぼうに 知らせだら

おいらが命いのちは たんまらねえ

と、くりかえし、くりかえし歌いながら、どこからかやってきます。

むすめたちは、夜おそくまでにぎやかに遊んで帰って行きました。帰りには、また、

うすい峠の 法覚坊に 知らせだら

おいらが命は たんまらねえ

と歌いながら、帰るのでした。

おばあさんは、

「おかしなことだなあ。うすい峠の法覚坊のそこに行って聞いてみたら、わかるかもしれない」と思って、出かけました。

法覚坊は、おばあさんの話を聞くと、しばらく考えてから、

「今晚、娘たちが来たら、なすの煮にたのを出してごちそうしてごらん」といつてくれました。

その晩、おばあさんは、なべにいつばいなすを煮て、待っていました。すると、いつものように、娘たちがにぎやかに歌いながらやって来ました。

うすい峠の 法覚坊に 知らせだら

おいらが命は たんまらねえ

娘たちが、ひと晩さわいでくたびれたころ、おばあさんは、

「さあさあ、おもしろかったな。おまえたちもお腹なかがすいたろう。いつばいめしあがれ」といつて、なすの煮たのをおわんにどっさり盛もって、むしろの上にならずらっと並べました。すると、なんだか急に眠ねむくなって、おばあさんは、何もかもわからなくなってしまいました。

しばらくして、おばあさんが、ひよっと目をさましてみたら、娘たちはひとりもいな

くなっていて、家の中は、しんと静しずかになっていました。むしろの上を見ると、おわんはみんなふせてあります。そのおわんをひとつずつひっくり返してみると、どのおわんの下にも、小さなきがひとつずつ入っていました。

山のきのこが、きれいな娘たちに化けて、おばあさんのところに、遊びに来ていたのだそうです。

これきって、とっぴんぱらりのふう

村上郁再話

資料『秋田むがしこ』今村義孝、今村泰子編／無明舎出版